

4月1日ゼミは開催します**現日本人になった人々の起源を探る**

—4月1日ゼミ紹介文：飯田 眞理会員記—

【はじめに】日本列島人の起源については、埴原和郎の「二重構造モデル」が定説のようにになっている。今回、考古学と遺伝子学を中心に、様々な学習をした結果、次のようなことに賛同することとなった。①旧石器～縄文文化をもたらした人々は、樺太経由と朝鮮半島経由で流入した人々であったこと。②西日本縄文人と関東・東北・北海道縄文人とでは遺伝的に異なること③琉球人とアイヌ人は起源が異なること④渡来系弥生人は遺伝的に多様であったこと、などである。

1. 考古学より

山田康弘氏によれば、旧石器時代の韓国で出土する剥片尖頭器（スムベチルゲ）は西日本においても出土例があることより、**朝鮮半島ルート**が列島への渡来の一番古いものとする。その後、東日本ではナイフ形石器が主体となり、瀬戸内海地域では国府形ナイフを伴う石器群が、九州では狸谷型ナイフを伴う石器群が展開するようになる。一方、北回りルートとしては、北海道を中心として確認される**細石刃剥片技法**（湧別技法）が分布を広げる。それから少し遅れて、湧別技法とは異なる朝鮮半島ルート起源の細石刃石器群が本州に登場して、地域性は解消されてしまう。

同様のことは、勅使河原彰氏と安蒜正雄氏も述べていて、縄文文化は列島の西と北からの系統関係で成立したとする。つまり、旧石器・縄文文化人の起源は、埴原和郎の「二重構造モデル」がいうような、南方ではなく、北方であったのである。

2. 遺伝子学より**(1) 齊藤成也氏の説****①沖縄人とアイヌ人の共通性**

現代日本人の核ゲノム解析による主成分分析で、沖縄人がアイヌ人と本土日本人の間に位置することなどから、埴原和郎の「二重構造モデル」が証明されたとする。

②「うちなる二重構造論」

現代日本人の核ゲノムの地域差より、出雲人は関東人より東北人に近い。このことより、仮説としての「うちなる二重構造論～3段階渡来モデル～」を提唱している。

*筆者は、これらについて疑問を持っている。

(2) 篠田謙一氏の説**①ミトコンドリア DNA の解析より**

東日本から北海道までの縄文人の主なミトコンドリア DNA ハプロタイプは N9b であり、60%以上である。ところが現在人にはわずか 2,1% しかないこと。一方、西日本縄文人の主であった M7a は、7,5% の現代日本人が持っていること。つまり、現在人には、東日本より西日本縄文人の遺伝子ほうが多く受け継がれていることになる。また、現代日本人は、極めて多様なハプログループを持っており、弥生時代か古墳時代にかけて、多くの渡来人と混血したことが示される。

②核ゲノム解析より

最近、縄文人や弥生人の核ゲノムの解析が出来るようになってきている。主成分分析により、現代の日本人を含む東アジアの集団と、縄文人、弥生人の関係を比較したところ、次のようなことが示された。

*現代日本人は大陸集団から離れた部分に位置していて、韓国人は、現代日本人と大陸人の間に位置している。

*縄文人は、大陸人から現代人を結んだ延長線上のはるか離れた場所に位置している。

*以上のことより、大陸集団が列島に進入し、在来の縄文集団と混合したためであると考えられる。ま

た、韓国人にもわずかではあるが、縄文系の遺伝子があることになる。実際、韓国南部の獐頂（ジャンハン）遺跡の人骨は、現代日本人と同程度に縄文人と近縁があることを示している。

* 北部九州の渡来系弥生人と考えられる安徳台甕棺人骨のゲノムは、完全に現代日本人の範疇にはいることがわかった。ということは、渡来系弥生人は、最初から現代日本人と同じ程度に縄文人のゲノムを受け継いでいたことになるが、他の説も考えられる。

* これらの結果からは、弥生の中期以降から古墳時代にも、多くの人々の渡来があったと想定できるので、古墳時代人の遺伝子解析が進行中ということである。

3. 日本列島文化の多様性

* 日本は単一国家といわれることがあるが、事実はそのようではない。弥生時代から律令時代までの古代はもちろんのこと、江戸時代までの日本列島には、様々な文化圏が存在していたのである。

* 奈良時代から平安時代にかけて、律令国家により東北蝦夷への征服戦がおこなわれた。また南九州の隼人も律令国家の集団とは異なる人々であった。

* 琉球王国は明治時代になるまで、日本には属さない国であった。形の上では薩摩藩の属国であったが、中国の冊封体制にも入っていて王国は続いていた。明治12年に琉球列島は琉球処分により日本に編入された。

* 一方、北海道は、江戸幕府や松前藩に統制されていたが、基本的にアイヌ民族のクニであった。それが明治2年に、新政府は蝦夷地を北海道と呼び改め、一方的に日本の一部として、アイヌ民族の言語や生活習慣を事実上禁じた。また、アイヌの人たちが利用してきた土地や資源を取り上げて国の財産だとした。（「公益財団法人 アイヌ民族文化財団」より）

* 現代の日本という国家が成立したのは、わずか百数十年前であり、それまでは、日本列島にはいくつかのクニが存在していたのである。現在の日本人は、様々な集団の遺伝子を持っていることになる。（了）

ゼミ会場と時間 13:15～16:50

- 1、全水道会館（水道橋駅）・中会議室（5階）
- 2、JR水道橋駅（東口）・都営三田線水道橋駅

（A1）下車徒歩1～2分

3、電話：03-3816-4196

人類と家畜

—磐城 妙三郎会員記—

人類の文明の発展に家畜がどれほど貢献したかを考えてみたい。家畜の主なものはイヌ、ネコ、ヒツジ、ヤギ、ブタ、ウシ、ロバ、ラクダ、ウマなどがあげられる。当然であるが家畜になる以前はどれも野生動物であった。しかもわれわれが現在目している動物の原種で野生種としてはすでに絶滅しているものもある。上記の中でもイヌとネコは元々は肉食であるが、その他は草食に分類される。イヌはオオカミやキツネの祖先種で人類がオオカミを家畜化したのが現代の「犬」ということである。ヒトとオオカミは狩猟においては競争相手であった。やがてヒトになつたオオカミと共同で狩りを行うようになり、さらにヒトとの社会生活に入り込むようになり家畜の「犬」が誕生した。ネコの祖先種はヤマネコでリビアヤマネコが家畜化してイエネコが誕生したとの事である。ただ犬と違ってネコは人為的に家畜化されたのではなく、自己家畜化がおきたとされている。その要因は農耕が始まり、穀物が貯蔵されるようになったことが原因と言われている。ネズミの繁殖である。ヒトはネコの行動を理解し、穀物の被害を減少させるのに利用したとのことである。さて、その他の家畜化された草食動物についてはどのようなであろう。家畜化する以前は全て狩猟の対象であった。農耕が始まり定住社会になると、ヒツジ、ヤギ、ブタ、ウシなどの幼獣の捕獲と飼育が始まり、小規模な牧畜が行われるようになる。定期的な乳や獣毛の入手が目的である。成長すれば繁殖に利用し、余剰になったオスは食肉や皮革に利用された。牧畜には家畜を管理するために牧童や牧畜犬と広大な牧草地が必要である。農耕地として適さない周辺の牧草地が活用された。牧畜の規模が大きくなるほど牧草地が不足し、より遠方の牧草地を利用するため遊牧民による広大な地域での遊牧が発展した。

ロバとラクダも元々は狩猟対象であった。野生のロバはアフリカ、チベット、モンゴルに生息していた。家畜化されたのはアフリカ種であった。ウマより先にヒトが騎乗したと思われる。駄獣としてはナイル川流域の交易に利用され、東地中海沿岸（レバント）

およびギリシャへと拡大した。ローマではウマに変わるまでロバが利用された。またシルクロードへも拡大した。ラクダにはヒトコブラクダとフタコブラクダがあり、前者はアラビア半島の砂漠地域で熱帯乾燥地域に適応していた。後者はイランや中央アジアの砂漠地帯で寒冷乾燥地帯に適応していた。コブには脂肪が蓄えられており予備のエネルギー源となる。

ラクダはロバや馬と違い何も食べなくても数週間は生き延びることが出来るそうである。

また荷物の積載量も200kg～300kgと多く、陸上長距離輸送に適していた。鉄道や四輪駆動のトラックが発明されるまでは陸上輸送の主役であった。ウマの祖先は北米大陸といわれている。氷河期にベーリング陸橋を渡って旧大陸へ拡散したが、北米大陸では絶滅したと言われている。北米大陸の現代の「馬」は新大陸発見後にスペイン人が持ち込んだ家畜馬とのことである。旧大陸へ渡ったウマはユーラシアからヨーロッパまで生息範囲を拡大したが多くの種は狩猟や気候変動などが原因で絶滅したと言われている。現代の「馬」につながる野生種はタルパンと呼ばれ、黒海に注ぐドニエプル流域とカスピ海に注ぐヴォルガ流域のステップ地帯（ウクライナ、カザフスタン）に生息し、その地域の農耕牧畜民によって家畜化されたとされている。乳、食肉、皮革の入手が目的であった。当初は家畜の管理を牧童と牧畜犬で行っていたが、馬具の改良と乗馬術の向上によってより多くの家畜の管理が可能となった。やがて家畜の数が大規模になると周辺の牧草地だけでは足りなくなり、遠方の牧草地を渡り歩く牧畜を専業とする遊牧民が登場する。彼らは家畜の群れを馬により騎馬で管理することにより効率を上げた。また農耕民や牧畜民との間で自らの家畜と生活必需品の交易や、遠隔地の特産品などの交易も行うようになった。またラクダの隊商による遠距離交易が始まると隊商の中継地の管理や通商路における護衛なども担うようになったと考えられる。スキタイや匈奴などの騎馬遊牧民が西アジアから中央アジアのステップや砂漠地帯を支配下におさめた。

「馬」への騎乗や馬車の発明の時期については諸説あり未だ結論には至っていない。前3千5百年頃のハミ痕のある頭骨が発見されたニュースがあった

が、その後の炭素14年代でスキタイ時代（前9世紀以降）のものと訂正されている。私見では馬車の発明には車輪と車軸及び平坦な道路が必要となる。サスペンション無しで凸凹の道路を走れば、その衝撃は車輪と車軸に集中的に加わり瞬時に壊れる。四輪であればカーブも曲がれない。前13世紀のカデシュの戦いでの二輪戦車が有名だが、青銅や鉄板の部品で接合部を補強しない限り実用には向かないと考える。4頭立て、3人乗りで戦場を走れば戦闘になる前に車輪は壊れ使い物にならなかったであろう。

歩兵の後方で指揮をする指揮官用の乗り物だったのではないだろうか。確かにアッシリアやエジプトの遺構から戦闘用の二輪戦車の図像が発見されているが果たして再現できるであろうか。以上。

作家永井路子に教えられたこと

—藤田 一郎会員記—

2023年1月27日に97歳で亡くなった作家永井路子の訃報がマスコミで報じられていた時、彼女が育った茨城県古河市の旧宅が一般公開されているのを、数年前に訪ねていったことなど、私もしばしば彼女の思い出にひたっていました。

永井路子との出会いは、今から40年前に私が勤務していた銀行の鎌倉支店長として仕事をしていた時です。当時は鎌倉に住んでいた彼女と、銀行が親しく取引を頂戴していた関係で、私の赴任直後に地区の担当者から、一度挨拶に伺って欲しいとの依頼がありました。しかし、時代考証のゆき届いた歴史小説を多数書いて、既に有名になっていた作家のところへ挨拶に行くのは、何となく面倒だなと思い、先延ばししていました。ところが、当時私がメンバーとなっていた鎌倉ロータリークラブから、機関誌への投稿依頼があり、書きあげた文章「いざ鎌倉」が、彼女の鎌倉武士に対する考え方を大幅に取り入れたものとなっていたため、念のため投稿前に彼女に原稿を見せて、了解をとりつけておいた方がいいと考えました。そこで、地区担当者に永井さんのところへ挨拶に行きたいと伝えて、永井邸訪問の準備をしてもらいました。

当日は、先方が永井路子（本名黒板廣子）さんと夫の黒板伸夫さん（歴史学者）、当方が私と地区担当者で、4人で掘りゴタツを囲んで、お茶を飲みながら1時間以上にわたって雑談をさせていただきました。冒頭に私から、鎌倉ロータリークラブの機関誌に投稿予定の私の一文について、永井さんの了解を得たいと申し出て、読んでいただきました。あっという間に読み終えた彼女は、「私の考え方も取り入れて下さって、なかなかいい文章ですね」と言っていて、機関誌への投稿は「問題ありません」と了解してくれました。

私の投稿文を読んだ彼女が、私が歴史に興味を持っていると思ったせいか、その後の対談は、専ら歴史の話に終始しました。対談とはいえ、彼女が殆ど一人で戦国武将について喋っていましたが、話が一段落したところで、私に対して「藤田さんは、戦国武将のなかでは誰がいいと思いますか」との質問がありました。突然の質問であり、かつ戦国武将の中で誰がいいかなどと考えたこともなかった私は、一瞬戸惑いましたが、何か答えなければならないと思い、「織田信長あたりがいいのではないですかね」と答えました。それに対して、永井さんから「織田信長のどこがいいのですか」と聞かれ、私は信長の持つ天才的な要素をいくつかあげて、説明しました。しかし、彼女からは「戦国時代にはルールもヘチマも無かったのですよ。だまし討ちでも何でもありの時代だったのですよ。そんな時代に、部下に殺されるような人は駄目なのです」と、バッサリと片づけられました。

その後に彼女が話したことを以下に要約しますと、歴史上の特定の人物や出来事について後世の人が振り返る場合は、後世の価値観で判断するのではなく、その時代の視点で（その時代の時代背景を念頭において）判断しなければならないということでした。極端な例えでいうと、戦国時代に現在の理想とされる「話し合いによる平和主義（平和共存）」をとる人はいたとしても、周囲の人達が全て武力によって相手を制圧し、武力によって自ら生き延

びることしか考えていなければ、その人はいずれ周囲の武力によって滅ぼされ、時代の敗者となります。つまり、その時代背景のもとで、ベストと思われる道を選択し適者生存となった者が、時代の勝者となるのです。

永井さんは、戦国武将のなかで誰がいいかという自分の意見を言いませんでしたが、私はあの時、徳川家康の名前をあげていけば、正解だったのではないかと後ですぐ思いました。戦国武将の中で、後世の人々に比較的人気が高いのは、豊臣秀吉や織田信長です。それに対して徳川家康は、この二人に対し屈辱的ともいえる従属関係にありました。豊臣秀吉からは、関東（江戸）への国替えを命じられ、これまでの本拠地であった三河や遠江を召しあげられました。また、家康は正室築山御前とはもともとうまくいってなかったようですが、その間に生まれた信康が織田信長の娘（徳姫）と結婚していて、徳姫が築山御前の嫁いびりを父信長に訴えたため、信長が激怒して築山御前の殺害を家康に命じました。家康は、それに従ったのです。

しかしながら、豊臣政権は一代限りで終わり、織田政権にいたっては一代も全うできなかったのに対し、徳川政権は関ヶ原の勝利を経て以降、十五代・260年余にわたって安定した統治を続けました。まさにその時代背景に見事に適応して、戦国時代を終わらせて徳川時代の体制を確立したということで、徳川家康こそが数ある戦国武将のなかで、真の勝利者となったのです。

永井路子は、歴史上の人物や出来事を見る場合は、後世の価値観で判断するのではなく、その時代背景のなかでいかにうまく適応したかによって判断すべきであると、私に教えてくれました。私は、40年前のこの言葉から多くのことを学びました。ありがとうございました。—完—

次回5月6日ゼミ・テーマ

埼玉古墳群「稲荷山古墳」出土鉄剣銘文を改めて見直す—相澤 省一会員